



IUFRO-J NEWS

No. 73 (2001. 8) —

新ユフロ理事会（第40回）がプラハで開催される

東京大学 鈴木和夫

新しい体制のユフロ理事会（2001～2005年）が、2001年3月25日から30日までの日程でウィーン（オーストリア）とプラハ（チェコ共和国）で開催された。ユフロ理事会へは1996年から拡大理事会のメンバーとして参加してきたが、今回からは第7部会長として理事の一員としての参加である。新しいユフロ体制では、理事会のあり方が少なからず従来とは異なるものとなったので、その概要を報告したい。

今回の理事会開催の前に、プロジェクトの研究打ち合わせでヘルシンキ大学（フィンランド）に立ち寄った。打ち合わせを終えてヘルシンキからウィーンに向かうヘルシンキ・パンター空港で、早朝、偶然にもリスト・シェバラ会長と同じ便に乗り合わせた。記念にと空港ロビーでシェバラ会長と並んで写真を撮ると、会長は私とほぼ同じ背丈で私の方が多少重めのようなのである。「ユフロ会長に就任されて大変でしょうね」と言うと、「ボランティアですから」と真面目な彼にしては涼しげな返事であった。シェバラ氏は20年ほど前に研究交流でウィーンに2年間滞在したことがあるということで、リタ夫人はウィーンの開会式典をスキップして直接プラハから合流するという。

ウィーン・フルクハーフェン・シュヴェヒャート空港までは2時間半の短い旅であった。ちょうど5年前の最初のユフロ理事会へ参加した時には、フランクフルト経由でウィーン空港到着が夜10時頃となり、ホテルへ向かう車の中で「ここはウィーン（Wien）なのか、ヴィエンナ（Vienna）なのか」と、乗り合わせたハチャリック氏（現在のFAOのNo.2で、ハチャリック氏の後任の林業部門のNo.1は現在ホスニー・エルラッカニー氏で

ある）と雑談しながらホテルまで一緒したのを思い出した。シェバラ氏は今日が最後のパスポートコントロールの日だといい、明日からEU圏ではEUの人々のパスポートコントロールがなくなるのだという。

開会式典（3月25日）

今日からヨーロッパでは夏時間の採用である。ヘルシンキでは日中零下10度ほどであったので、ウィーンでは殊の外暑く感じられた。それにしても3月下旬からの夏時間の採用は少し早いように感じられたが、緯度の高い国々に住む人々の待ちこがれた願望がそうさせるのであろうか。

開会式典は、自己紹介もなく新しい理事会メンバーによってマリアブルンで開かれた。新理事会の新しい顔ぶれは、マレーシア世界大会の最終日に新旧メンバーによる昼食会があったので一応分かるはずであるが、相変わらず手短な早口の自己紹介では、小生には正確な名前さえもインプットされない。

新理事会メンバーは、（会長）Risto Seppala（フィンランド、前副会長）、（前会長）Jefery Burley（UK）、（副会長）Eric Tessier du Cros（フランス、前Div.2コーディネータ）、Don Koo Lee（韓国、前会長指名理事）、（部会長）Div.1 John Parrotta（USA、前副コーディネータ）、Div.2 Ladislav Paule（スロバキア、前副コーディネータ）、Div.3 Dennis Dykstra（USA、留任）、Div.4 Klaus von Gadow（ドイツ、留任）、Div.5 Cathy Wang（台湾、前副コーディネータ）、Div.6 Niels Elers Koch（デンマーク、留任）Div.7 鈴木和夫（日本、前副コーディネータ）、Div.8 Alain Franc（フランス、前副

コーディネータ), (理事 General Members: 従来の、地域を代表する理事 9 名と会長指名の理事 3 名を合わせて、新しく scientific, geographic, gender and other possible balances を考慮して新理事 10 名となった) Susan Conard (US), Ruben Guevara (Peru, 留任), Afonso Hoeflich (Brazil), John Innes (Canada, 留任), Iba Kone (Kenya), Gordon Miller (Canada, 留任), Abdul Razak (Malaysia), Victor Teplyakov (Russia), Karel Vancura (Czech Republic, 留任), Yaoguo Xiong (China), (会計理事) Mario Broggi (スイス), (事務局長) Heinrich Schmutzenhofer (オーストリア, 定年の 2003 年迄留任) からなる。拡大理事会は、さらにタスクホース, SPDC および SilvaVoc のコーディネータ, 各部会の副コーディネーター, 事務局員が加わり、総勢 80 名程度となる。

マリアブルン (写真-1) は、「マリアの泉 (井戸)」を語源としており、11 世紀以来の古い謂れはあるものの、ユフロとの関係は 1874 年に創設された連邦森林研究センターがマリアブルン修道院に居を構えたことに由来している (1887 年)。開会式は、前回同様、音楽の都ウィー



写真 1 開会式典が行われたマリアブルン(ウィーン)



写真 2 モーツァルトの演奏で始まった開会式典

ンに相応しくアンサンブル・クラシック・ウィーンによるモーツァルトのカルテットで始められた (写真-2)。式典の間には、有名なクラシックであろうカルテットやセレナーデなどが演奏された。午後には、シェーンブルン宮殿 (注) にある森林研究センター内のユフロ事務局を訪れて、ユフロの概要と事務局体制の説明があった (写真-3)。

注: シェーンブルン宮殿は、ハプスブルク家の夏の宮殿で、ベルサイユ宮殿に対抗して造られた 1441 室あるというヨーロッパで最も壮麗な宮殿として知られている。マリーアントワネットが過ごしたといわれ、「会議は踊る」で知られるウィーン会議の舞台となった。乗り合わせたタクシーの運転手は、人口百数十万のこの街で、この建物を維持するにはお金がかかり過ぎるというが、ウィーン観光の見所の一つである。

3 月 26 日

開会式の開かれたウィーンから理事会会場のブラハへの移動日である。車で移動するとヨーロッパの地理が漸く飲み込めてくる。国境には大した施設もないが、検疫のために時間だけが過ぎた。こののんびりとした時間が様々な話題を交歓する良い機会となっている。そして、のんびりとした田園風景を楽しみながら、「黄金の街」あるいは「北のローマ」といわれ、中世そのままの街並を残しているブラハの美しい街にたどり着いた。チェコ共和国は、ビールの味とともにボヘミアのガラス工芸もあまりにも有名である。

第 40 回理事会 (3 月 27~28 日)

理事会の開催はブラハ農科大学に会場を移して行われ



写真 3 ユフロ事務局のスタッフ(ユフロ事務局で) 右から 2 人目はシュムツェンホッフアー (事務局長), 4 人目はランガー (SPDC), 左端はブルーラー (SilvaVoc)

た。ブラハ城に近いホテルからバスで大学キャンパスに向かうと、盛大に吹奏楽団に迎えられ(写真-4)、記念撮影となった(写真-5)。

午前は、ブラハ農科大学での開会式にあてられた(写真-6)。さて、今回の理事会は以前のスケジュールとは大幅に異なっていた(IUFRO-J NEWS No. 62 & 66 参照)。まず、従来の委員会の名称、Policy and Planning Committee (PPC: 構成は会長、副会長、事務局長などの執行委員からなる)、Programme Committee (PC: 構成は部会長からなる)、Administration Committee (AC: 構成はおもに地域代表理事からなる)は、それぞれ Management Committee (MC)、Science Committee (SC)、Policy Committee (PC) に改称された。従来の理事会日程は、PC と AC の会合にそれぞれ1日あて、総会 (Full Board) が2日間で、合計4日間を理事会日程としていた。今回は、議題の重複を避けて、合計2日間に縮めて、理事が理事会開催期間中息抜きをする時間をなくしたのである。従って、初めての理事会であった

が、極めて手際の良い進行であった。とはいえ、主要な議題はバスの中やロビー交渉で決めてしまうのは相変わらず変わらない方法である。

理事会で検討された2・3の話題を以下に記した。

- 1) 会計理事 (Mario Broggi, スイス) と Executive Secretary (Heinrich Schmutzenhofer: 以前は Secretary としていた) の承認。
- 2) マレーシア世界大会におけるポスターのキャンセルが多かったことに、次回はどうか対処するのか。ご存じのように、マレーシアの世界大会では多数のポスターの申し込みがあったが、同時に多数のキャンセルがあった。
- 3) 新ユフロ・ロゴの採用: 現在のユフロ・ロゴ (1967年に採用) を新しいものにするという提案。理事会の決定は、理事会メンバーの会長1、前会長1、副会長2、部会長8、理事10、会計理事1、事務局長1、の合計24名に投票権が与えられていて、採決で決められる。今回は、ロシア理事が欠席、前会長および議長である現会長は保留のため、合計21名の投票となった。私は、提案された新しいロゴマーク(写真-7)は、可愛いもののコン



写真4 ブラハ農科大学の入り口に待ち受けた楽隊



写真6 新しい会長、部会長らが演壇に上がったの開会式
右端2人目が筆者(ブラハ農科大学で)



写真5 新しいユフロ・ファミリー
中央1列目の赤いコートがリスト・シェバラ会長

IUFRO

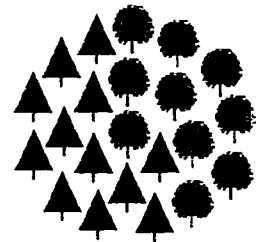


写真7 新しく提案されたユフロのロゴマーク

セプトがはっきりせず、一方、現在のロゴマークは個人的には京都大会以来親しみが有り、また、森林の営みは長期にわたることからロゴマークも早計に変えるべきでなく、何らかの記念すべき時期に提案すべきだと反対した。採決は挙手によって行われて、1票差で否決された。

翌日は早朝からSC委員会が開催され、午前11時15分には引き続いて総会が開かれてSC委員会で検討された事項が速やかに承認された。午後1時からMC委員会が開催され、2時30分から総会が開かれて午前と同様に速やかに議事が処理された。

4) ブリスベン世界大会の準備：大会運営委員長の説明があり、全てが順調に進められていた。理事会では、余りにも周到な準備状況に、あと4年もあるのだからのんびり考えようとの意見が出るほどであった。1997年に開催したバイオリフォル・ワークショップのことが思い出されて（IUFRO-J NEWS No. 64 参照）、国際会議に慣れているブリスベンの光景が目につかんだ。

ユフロ理事会は、同伴者を含めると80名程度の会合となるために、昼食をとるだけでも場所に苦労するのが現状である。従って、理事会は毎年開催し、拡大理事会は隔年開催としてはとの意見が出されたが、どうせやるなら一緒の方が良いとの意見もあり、今後検討することになった。

このような理事会の議題に関する資料は、事前にインターネット上からダウンロードすることになっている。百ページを遙かに超す会議資料を印刷・持参するだけでも一仕事である上に、直前になってバージョン・アップされることも大きな負担に感じられた。



写真 8 ブルノ近郊保存林 Flood-plain forest での筆者

エクスカーション（3月29～30日）

エクスカーションはチェコ第二の都市ブルノの近くで行われた。ブルノの人口は40万人弱であり、メンデルがエンドウの交配実験を行ったという修道院の跡がメンデル記念館として知られている。何処に行ってもブナ林やナラ林が多い。そんな中で、IBPの研究対象には含まれなかったという flood-plain forest（写真-8）は、いままでに見たことのない独特の森林のタイプであった。

エクスカーションの最終日の30日には、翌朝ブラハ空港から帰国する人々が一足先にエクスカーションの場を後にした。次回の理事会開催は、USDA とカナダからの招致要請があり、ポートランド（オレゴン）とバンクーバー（ブリティッシュ・コロンビア）で2001年6月に開催される予定である。次回から、本格的な理事会の活動が始まる。

第7回ユフロ国際木材乾燥会議(於つくば)の運営に携わって

森林総合研究所 黒田尚宏

はじめに

第7回ユフロ国際木材乾燥会議(7th International IUFRO Wood Drying Conference)が、去る2001年7月9日(月)~7月13日(金)に、つくば国際会議場(茨城県つくば市)において開催された。本会議は、IUFRO 5.04.06(第5部門・林産・木材加工分科会・木材乾燥作業部会)が主催し、2~3年毎に世界各地で開催される研究集会である。これまでヨーロッパ、オセアニア、北米、アフリカで開催され、7回めの今回が初めてのアジア地区での開催であった。つくば開催にあたって、森林総合研究所(開催事務局)を中心に、大会運営委員会を組織して準備と運営を行ったものである。会議には、21カ国から約150名もの参加があり、成功裏に終了することができた。

ここに、運営に携わった一人として、会議の概要を紹介するとともに、IUFRO-Jをはじめ開催に御協力を頂いた関係各位に感謝申し上げる次第である。

会議までの経緯と運営

第5回の会議(カナダ・ケベック)において第7回会議を日本において開催する方向で調整することが決定された。このため我が国では、招致委員会を結成して開催時期や場所等を協議し、第6回会議(2000年1月、南アフリカ共和国・ステレンボッシュ)において、つくば開催が決定された。この正式決定を受けて、2000年7月には木材乾燥に関する研究者と関係団体によって第7回ユフロ国際木材乾燥会議組織委員会ならびに運営委員会が、大学・試験研究機関・関連団体のメンバーによって組織された。会長を岡野健東大名誉教授が、運営委員長は久田卓興(森林総研)が務めることになり、森林総研の乾燥研究室に事務局が設置された。また、アイシーエス企画(株)(国際会議等の運営企画を専門とする会社)が参加登録および受け付け等の会議運営に参画し、よりスムーズな準備と運営に資することとなった。

本会議の特徴

今回の会議は、21世紀にはじめてであり、またアジアで開催されるのも初めてということで、極めて節

目的な意味合いを持つため、より充実した会議運営が求められることとなった。

前回までは、世界20カ国以上の国々から100名前後が参加しているが、日本は物価が高いため、参加者の減少を危惧する声もあった。しかし、今回は国内あるいはアジア地域からの参加者が増え、最終的に21カ国から148名の参加登録者を数え、これまでの最高となった。発表申し込み件数も多く、国際会議場内に2発表会場が設けられた。参加人数の増加には、我が国における乾燥技術を巡る情勢に加えて、発展途上国からの参加者に対する参加費補助や早期参加登録者への優遇措置(宿泊費補助)が行われたことも一助となったものと思われる。これらの財政的援助は、参加登録費だけではなく、日本学術振興会、国土緑化推進機構、日本木材乾燥施設協会をはじめとする多くの団体や企業からの助成金や寄付金によってまかなわれたものである。

会議のメインテーマは、「Moisture control in environment friendly housing and wood drying technology in new century(新世紀における環境に優しい住宅の水分管理と木材乾燥技術)」とされた。20世紀における木材乾燥技術は生産効率性と品質の向上を目指して発展してきたが、今後の乾燥技術の方向は、生産技術として環境にやさしく、製品としては居住性や耐久性など住宅性能と密接に連携した技術として位置づけることが大切であるためである。そのため、これまでの会議と比較して、乾燥技術そのものに限定することなく、利用技術との連携をも対象にしたことが会議の特徴となり、乾燥材の用途に関する発表も増加している。

プロシーディングの充実も図られ、ポスター発表に関してもフルペーパーの提出が求められた。ポスター説明の前にショートスピーチによるガイダンスを導入したことも新しい試みであり、これまでになくポスターセッションでの発表件数が増加した。研究発表のポスター展示と併設して、企業展示コーナーも設置され、これまでになく充実した展示コーナーを設けることができた。これらの新しい試みについては、参加者の評判も上々であった。このため次回大会でも、展示発表の充実とともに、ショートスピーチが取り入れられるものと思われる。



写真 1 参加者の面々 (記念撮影を終えて)

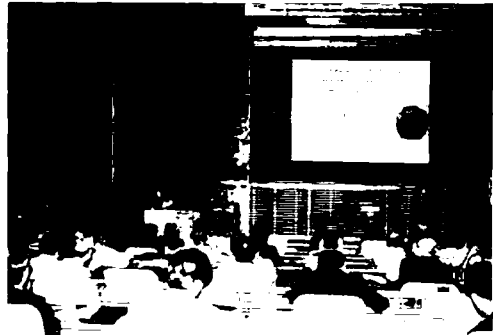


写真 2 基調講演 (メイン会場)

開会と基調講演

梅雨の季節とはいえ、一滴の雨もなく連日の猛暑が続くなかでの開会を迎えた。初日は、大会会長・岡野氏による開会挨拶に続き、ユフロ第5部門(林産)の副コーディネーター(Dr. H. Rosen, USA)およびユフロ木材加工分科会のコーディネーター(Dr. Y. Fortin, Canada)の役員挨拶、さらに森林総合研究所理事長・廣居氏による歓迎挨拶により会議が始まった。

開会式に次いで二つの基調講演が行われた。まず、ユフロ木材乾燥作業部会のコーディネーターであるP. Perre教授(LERMAB, France)が、乾燥技術の発展のために基礎研究と現場との結びつきの大切さを指摘した。次に、今大会の事務局長を勤めた森林総研の久田氏が、我が国における木材乾燥の歴史と将来について講演を行い、我が国における乾燥問題の特性を語った。森林資源に対する考え方や木材乾燥の位置づけは国によって異なり、研究や技術開発の事情も異なるが、今後とも学術情報の交換を行い、乾燥技術にかかわる研究成果を現場に還元することの重要性を認識させる講演であった。

研究発表

口頭による研究発表は、11のセッションに区分されており、全体で50件ほどが報告された。発表の2日目のみは、発表件数が多いことから、木材乾燥の基礎分野と応用分野とが別会場に分かれて行われた。ポスターセッションでは28件の発表が行われた。おおまかに内容を区分すると以下の通りである。

1) 乾燥にかかわる木材の基礎物性

木材の収縮と変形、および繊維飽和点や平衡含水率にかかわる因子に関するもの、3次元移動解析プログラムや熱定数等の数値解析による熱・水分移動の評価や解



写真 3 ポスター発表風景

明、高温における応力の発生と緩和、通気性に関する報告が主なものであった。水分非定常状態の下や比較的高温域での力学的物性や熱・水分の移動についてはさらに検討が必要と思われる。

2) 木材乾燥のモデリング

有限要素法による変形や応力の予測や初期条件に基づく乾燥過程の最適化モデル、棧積みによる乾燥過程の変化予測、乾燥過程における熱や水分の移動を予測するなどが発表されている。

3) 乾燥装置とその応用技術

乾燥操作の改善に関する報告が中心で、前処理への蒸気の活用や送風速度と棧積み方法、ユーカリ材の乾燥スケジュール、真空乾燥、熱風と高周波加熱を組み合わせた乾燥方法、飽和蒸気や過熱蒸気の活用に関するものが主であった。乾燥方法別では蒸気加熱式乾燥がモデル化やシステム化を図る上での主な対象であり、一方で高周波を使った乾燥の効率化や難乾燥材への適用も進んでいる。低エネルギー消費、低環境負荷等が装置改良やシステム開発の課題となっているが、さらに種々の試みが

われることを期待したい。

4) 乾燥過程のモニタリングと乾燥機制御

乾燥過程のモニタリングに関して、乾燥過程における応力発生や変形等のモニター技術、および含水率の測定技術について報告された。また、コンピュータによる乾燥機制御の方法などもあった。

5) 乾燥品質

乾燥による木材の変色、強度の変化、耐久性に関する研究や、乾燥材品質の規格化にかかわる発表があった。特に、乾燥材の品質選別やその区分等に関しては、規格が国際化する中でさらに議論が必要と思われる。

ソーシャルイベントおよびツアー

会期中には、懇親会等の社交行事が設定された。特に、懇親会には会議出席者だけではなく、後援の林野庁をはじめ、寄付を頂いた団体・企業の招待者を含めて、盛大に催された。太鼓の演技など、指向をこらした催しを楽しんでもらったものと思う。

インコンファレンスツアーとして、ポラテック(株)ブレカット工場、住宅展示場、住友林業(株)筑波研究所、および森林総合研究所の見学会が行われた。暑い中でのツアーであったが、どの場所でも熱心に質問する参加者の姿が見受けられた。多くの参加者に、日本独特の建築仕様と部材の使い方、乾燥施設等に興味を持っていただけたものと思う。

また、会期終了後には日光と東京めぐりのツアーもあり、37名もの参加者があった。短いツアーではあったが、暑かった会期後の憩いの場としては中禅寺湖畔と周辺の森林は極めて快適であり、また日光東照宮と浅草寺では古い木造建築と歴史が感銘を与えたものと察している。

おわりに

今大会は初めてのアジア地域での開催ということもあり、韓国および中国からの参加者が増加し、同地域における情報の共有が可能となったものと期待している。一方国内的には、我が国の木材輸入量は総需要の約80%に達するが、第二次世界大戦後に植栽されたスギが十分に有効利用されているとは云いがたい状況にある。そのため、乾燥技術の効率化が解決すべき課題の一つともなっているが、今会議での情報交換がこれらのブレイクスルーのきっかけとなることをも期待したい。なお、次回(2003年)の大会はルーマニアで開催される。我が国からも多数の参加者があり、今大会に引き続き実りある議論が行われることを期待したい。



写真4 バンケットの一幕



写真5 インコンファレンスツアーの一幕



写真6 ポストコンファレンスツアーの一幕

日本における物価高によって海外からの参加者減と開催経費が会議招致に際する主な懸案事項であった。しかし、結果としてこれまでで最高の参加者があり、また経費的にも多くの団体や企業からの援助によって、成功裏に大会が終了した。会議開催にあたっての準備と会議運

営に関しては、海外からの多くの賛辞を頂いたことを記して、参加者ならびにご協力を頂いた方々への謝辞としたい。

なお、プロシーディングをご入用の方は、森林総合研究所木材乾燥研究室まで、連絡頂きたい。また、大会中

の風景写真をご入用の方は、森林総合研究所のホームページの次の URL をアクセス願いたい。

(<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/wdc7-iufro/index.html>)

<IUFRO-J News への寄稿のお願い>

会員の皆様のご協力により「IUFRO-J News」の発行も順調に進んで参りました。これからもニュースの内容を充実させるために、IUFROの研究集会などの開催予定や参加した集会の内容紹介など、会員に広く知らせたい事柄について記事をお寄せください。また、研究集会などに参加予定、または参加された方を紹介いただければ、事務局から執筆のお願いをすることもできます。会員相互の情報交換の場として「IUFRO-J News」をどうぞご活用ください。

(事務局)

平成 13 年度機関代表会議報告

第 112 回日本林学会大会期間中の平成 13 年 4 月 4 日、岐阜大学全学共通教育講義棟 31 番教室において表記会議を開催いたしました。会議には A 会員 20 機関、B 会員 6 機関の計 26 機関代表と、鈴木和夫 IUFRO 第 7 部会長が出席されました。会議においては小林幹事の司会で議事を進行しました。ここで審議・承認された議題の概要を報告いたします。

なお、会議開催につきましては、第 112 回大会運営委員会の皆様にご大変お世話になりました。この場を借りましてお礼申し上げます。

1. 平成 12 年度会務報告

1. 一般会計

1) IUFRO-J News 発行

No. 70 (2000. 8 14p) : 集會報告・機関代表会議報告

No. 71 (2000.11 12p) : 世界大会報告

No. 72 (2001. 3 12p) : 集會報告と案内

会誌送付会員 (平成 13 年 3 月 31 日現在 (会費納入者数)) の現状

A 会員 : 27 機関 (795) 名分納入済み
(会員数前年度比 : 減)

B 会員 : 23 機関 16 機関納入済み
(会員数前年度比 : 増)

C 会員 : 39 名 (33) 名納入済み
(会員数前年度比 : 増)

賛助会員 : なし

2) 理事会出席助成

第 40 回理事会 (2001. 3) 鈴木和夫

J-News No. 73 に鈴木理事が報告

3) IUFRO 関連研究集會事務局・参加助成事務局 (20 万円)

久田卓興 (森林総研)

参加 (10 万円)

小林裕之 (富山県林技セ・林試)

山中征夫 (東京大学)

村松直人 (森林総研)

2. 特別会計

一般会計へ移動

2. 平成 12 年度会計決算報告

1. 一般会計 (平成 13 年 3 月 31 日現在)

(収 入)

科 目	予 算	決 算	備 考
前年度繰越金	268,323	268,323	
会費 A 会員	850,000	795,000	
B 会員	125,000	112,000	
C 会員	36,000	33,000	
前年度未収分	79,000	57,000	
会費前納分	—	3,000	
雑 収 入	1,000	2,409,593	特別会計より 移動分・利息
合 計	1,359,323	3,677,916	
(単年度収入合計)	(1,091,000)	(3,409,593)	

(支 出)

科 目	予 算	決 算	備 考
情報活動費	750,000	525,613	J-New 印刷費・発送料・封筒代
会 議 費	50,000	35,000	機関代表会議 (愛媛大学)
旅 費	300,000	0	理事会出席助成次年度へ持越
雑 費	10,000	10,525	振込手数料・送金手数料
予備費 助成	100,000	500,000	事務局・参加助成 選考委員旅費
次年度繰越金	149,323	2,606,778	
合 計	1,359,323	3,677,916	
(単年度支出合計)	(1,210,000)	(1,071,138)	

2. 特別会計

(収 入)

科 目	予 算	決 算	備 考
前年度繰越金	2,406,501	2,406,501	
預 金 利 息	6,000	2,334	
合 計	2,412,501	2,408,835	

(支 出)

科 目	予 算	決 算	備 考
引き落とし 残 金	0 0	2,408,835 0	一般会計へ移動
合 計	0	2,408,835	

3. 平成12年度監査報告

平成12年度ユフロ-J事業会計について監査した結果、各種帳簿ならびに証拠書類はいずれも、正確に整理・記録されており、本件経理は適正であったことを認める。

平成13年3月31日

IUFRO-J 監 事

財団法人 林業科学技術振興所 事業部長
三 國 昇

4. IUFRO-J 和名変更

第21回 IUFRO 世界大会にて、“International Union of Forestry Research Organizations”の Forestry を Forest に改めることになった。

については、IUFRO-J の和名「国際林業研究機関連合—日本委員会事務局」の国際林業を国際森林に変更したい。

5. 平成13年度事業計画案

1. 一般会計事業

1) IUFRO-J News 発行

番号(予定時期):掲載記事に関する事務局案,
各号とも16ページ予定

No. 73 (2001. 6):集案案内, 集案報告, 機関
代表会議報告

No. 74 (2001.10):集案報告, 理事会報告

No. 75 (2002. 2):集案報告

∴ 各1300部印刷し, 会員配布

注:掲載記事はIUFRO活動で会員に広く知らせたい事項を優先したいと考えます。積極的に事務局にご相談下さい。

2) 理事会出席助成

未 定

3) IUFRO 研究集案事務局・参加助成

未 定

4) 長期滞納会員の解消

5) 新規会員の加入勧誘

5. 平成13年度予算案

1) 一般会計

(収 入)

科 目	予 算	備 考
前年度繰越金	2,606,778	
会費 A 会員	825,000	27 機関
B 会員	155,000	23 機関
C 会員	33,000	37 名 13 年度会計納入者 4 名 除く
未 収 分	106,000	会費未収 (H11・12 年度合計)
次年度前納		
雑 収 入	1,000	
合 計	3,726,778	
(単年度収入計)	(1,120,000)	

(支 出)

科 目	予 算	備 考
情報活動費	750,000	J-News印刷費・発送料・封筒代
会 議 費	50,000	機関代表会議(岐阜大)
旅 費	600,000	理事会出席助成(2年度分)
雑 費	10,000	振込手数料・送金手数料
予備費 助成	500,000	事務局・参加助成
次年度繰越	1,816,778	
合 計	3,726,778	
(単年度支出計)	(1,910,000)	

6. 役員選出

承認された平成13年度役員は下記の通り

	(氏名)	(所属)	(任期)
議長	廣居 忠胤	森林総研	H12年10月～
幹事	小林 繁男	森林総研	H12年4月～
	鈴木 皓史	森林総研	H13年4月～
監事	照井 靖男	日 林 協	H 8 年～
	三國 昇	林 振	H 9 年10月～
主事	香川 隆英	森林総研	H13年4月～

7. その他

○SilvaVoc-J 事業の進捗状況について

SilvaVoc 事業は、IUFRO 本部が1995年から実施している、わが国の ODA 予算を主な資金とする多言語林業・森林科学用語検討事業です。1996年に IUFRO 本部

から日本の関係者に協力要請があり、1997年からIUFRO-J事務局が日本の窓口として事業に協力することになりました。その際、事業が専門用語の学術的検討であることから、それを行うに相応しい組織として日本林学会、日本木材学会に協力を求め、IUFRO-J事務局と両学会代表、IUFRO各8部門の担当者でSilvaVoc-J委員会を組織し、SilvaVoc事業に協力してきました。

1) 2000年活動記録

① 多言語森林用語データベース

第21回IUFRO世界大会のForest Terminologyセッションにおいて松本光朗氏(森林総研)が出席し、SilvaVoc-J事業として開発した多言語データベースについて、「Proposal of a Multilingual Forest Terminology Database Designed for Western and non-Western Languages 西洋言語および非西洋言語のために設計された多言語森林用語データベースの提案」として発表した。(IUFRO-J

News No. 69)

② 林学検索用語集編集への協力

- ・編集作業に協力を行ってきた財団法人日本林学会の林学検索用語集は平成13年3月に発行予定
- ・SilvaVoc-Jは、林学検索用語集のCD-ROM版を作成し用語集に添付する。

2) 2001年活動計画

IUFRO本部のSilvaTermサーバーを日本語以外の文字も同様に使えるよう改良・増設し、用語の追加(検索用語集分)を行う。また、わが国にも本部同様のサーバーを設置する。

なお、本事業に対するODA予算による援助は2000年度で終了する予定であるが、SilvaVoc-J事業自体は2001年12月まで継続し、2002年度以降、SilvaVocにはIUFRO-Jが対応して本部の事業をサポートするが独自の事業は行わない。

IUFRO-J 入会申込書

- | 1. 会員種別 (該当するものに○) | 会費 (年間) |
|--------------------|---------------------------------|
| A 会員 (IUFRO 加盟機関) | 1,000 円×登録研究者数 (当該年度 4 月 1 日現在) |
| | 500 円×学生会員 (当該年度 4 月 1 日現在) |
| B 会員 (IUFRO 加盟機関) | 1,000 円×登録研究者数 (当該年度 4 月 1 日現在) |
| | または、定額 1 口 5,000 円を 1 口以上 |
| C 会員 (個人) | 1,000 円/人 |
| 賛助会員 (機関、団体) | 1 口 10,000 円を 1 口以上 |

2. 会員名 (A, B, 賛助会員は機関・団体名, C 会員は氏名)
- _____

3. 会員住所 (会誌送付先, 会費請求先)

郵便番号 _____

住 所 _____

TEL: _____ FAX: _____

E-mail: _____

4. 登録研究者数 (A, B 会員) _____ 名

必ず、名簿を添付してください。学生会員につきましては区別して記載してください。

5. 会費口数 (B, 賛助会員) _____ 口

B 会員は定額制を希望される場合に記入してください

6. 機関代表者氏名 (A, B 会員): _____

7. 連絡員氏名 (A, B 会員): _____

8. 申込年月日 _____

添付書類: 登録研究者名簿 (様式は任意)

事務局記入: 受付年月日 _____

IUFRO 研究集会事務局・参加助成実施要領

対象集会：IUFRO 関連研究集会（参加の場合は、海外に限ります。）

助成金額：事務局：20 万円/団体、
集会参加：10 万円/人 を目途とします。

応募資格：会費を納入している機関、会員

- 会則第 5 条に則り、研究者登録をお忘れ無くお願いします。事務局で会費納入を確認できない方は助成の対象にできません。
- 研究集会参加は筆頭発表者に限ります。

募 集：随時受け付けています。

別添申請書に必要事項を記入し、必要資料を添付して、下記までご送付下さい。

〒305-8687 茨城県稲敷郡茎崎町松の里 1 番地 森林総合研究所内

IUFRO-J 事務局 宛

選 考：12 月末現在で集計し、集計時から 1 年 3 ヶ月後までに開催される研究集会を選考対象として選考委員会に諮ります。

（2001 年 12 月末集計時の選考対象は 2003 年 3 月末までに開催される研究集会となります。）

選考結果：IUFRO-J News で発表。

配布時期：原則として集会開催 1 ヶ月前。

（国際集会の場合、キャンセルになる場合もありますので、できるだけ直前とします。）

備 考：助成を受けた機関・会員には IUFRO-J News への投稿を求めます。

注 意：助成金額はあくまで目途です。

IUFRO-J 一般会計の収支状態によって、事務局で勘案いたします。

附 則：

（平成 9 年 4 月施行通知、初出 IUFRO-J News No. 61）

（平成 9 年 7 月 10 日 IUFRO-J News No. 61 掲載一部改訂）

（平成 13 年 8 月 IUFRO-J News No. 73 掲載一部改訂）

事務局 受付年月日: _____

整理番号: _____

IUFRO 研究集会事務局・参加助成申請書

助成区分: 事務局 参加 (どちらかに○)

応募者氏名(事務局の場合は代表者):

所 属:

連絡先: 〒 _____

TEL/FAX _____

E-mail _____

研究集会名:

開催時期・場所:

集会規模:(概数)

IUFRO との関連:(例 第 x 部門のワークショップまたはシンポジウム)

助成金の主な使途(事務局の場合)

発表題目(研究集会参加の場合)

添付資料(集会の内容や発表がわかる資料を、必ず添付してください。)

国際森林研究機関連合一日本委員会会則

(名称と目的)

第1条 本会は、国際森林研究機関連合一日本委員会(略称をIUFRO-Jとする)と称し、国際森林研究機関連合(以下IUFROと呼ぶ)の目的に沿って、その事業に協力するため、国内の森林・林業・林産業に関連する研究機関の相互連携を図るとともに、IUFROに関連する諸活動に貢献することを目的とする。

(業務)

第2条 本会は、前条の目的を達成するため次の業務を行う。

1. わが国におけるIUFRO加盟機関相互の情報交換の推進および連絡調整
2. IUFROの評議員会への代表および代理の決定
3. IUFROが組織する研究グループ活動の支援
4. その他本会の目的達成に必要な事項

(事務局)

第3条 本会は、事務局を、茨城県稲敷郡笠崎町松の里

- 1 森林総合研究所内におく。

(会員)

第4条 本会の会員は、次の4種とする。

1. A会員 IUFRO加盟機関
2. B会員 IUFROに加盟していないが、本会の趣旨に賛同する森林研究機関
3. C会員 A、B会員の機関に所属していないが、本会の趣旨に賛同する個人
4. 賛助会員 本会の趣旨に賛同する機関または団体

(機関会員の研究者登録)

第5条 A、B会員に所属し本会の趣旨に賛同する研究者は、本会に登録するものとする。登録研究者に移動のあった場合は、その都度事務局に連絡する。

(会費および会計)

第6条 会費は次のとおりとし、毎年度のはじめに納入するものとする。A、B会員の会費は、当該年度4月1日におけるその機関の登録研究者数に応じた額(1人当たり年額1,000円、但し学生会員は500円)とする。ただしB会員については、定額制(年額1口5,000円を1口以上)をとることもできる。C会員の会費は年額1,000円とする。賛助会員の会費は年額1口10,000円を1口以上とする。

第7条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第8条 本会の予算および決算は、機関代表会議に提出して、その承認を受けるものとする。

(役員)

第9条 本会に、次の役員をおく。

- | | |
|----|------------------|
| 議長 | 1名 |
| 幹事 | 若干名(うち1名を幹事長とする) |
| 監事 | 2名 |
| 主事 | 1名 |

第10条 議長は本会を代表し、会務を総括する。幹事は、会務執行に関する事項を審議し、幹事長は会務を執行するするとともに議長を補佐し、議長にさしつかえあるときはその職務を代理する。監事は、会計および会務執行の状況を監査する。主事は幹事長の職務を補佐する。

第11条 役員の出選方法は、次のとおりとする。議長、幹事および監事は、機関代表会議で選出し、幹事長は、幹事の互選とする。主事は議長が委嘱する。

第12条 役員任期は、2年とし、再任を妨げない。任期中に欠員のできた場合は幹事会において選出し、次期機関代表会議で承認をえるものとする。欠員を補充するため選出された役員任期は前任者の任期の残りとする。

(会議)

第13条 会議は、機関代表会議および幹事会とする。

第14条 機関代表会議は、A、B会員それぞれの機関で選ばれた代表(1名)で構成する。通常毎年度頭初に開くこととし議長が召集する。機関代表会議では、会務報告、予算、決算の承認、第2条2項等会の重要事項を審議決定する。

第15条 幹事会は、議長および幹事をもって構成し、議長が召集する。幹事会には、議長の指名する者を参加させることができる。

(その他)

第16条 本会々則の変更および本会に関する重要事項は、機関代表会議で決める。

- 付則
- 1) 各機関に連絡員をおき事務局に登録する。
 - 2) 本会則は昭和54年4月7日より施行する。
 - 3) 昭和57年6月24日一部改訂(第6条 学生会員の会費)

IUFRO-J 事務局からのお知らせ

IUFRO-J 研究集会事務局・参加助成

12月末現在で集計した結果、研究発表3件の応募がありました。選考委員及び事務局による厳正な審査の結果、以下の研究発表1件を助成することになりました。

氏名(所属)

研究発表 千葉幸弘(森林総研)

今年度から選考集計は年1回12月に行うこととしまし

た。選考対象とする研究集会は、選考集計の翌年度の3月末までです。今年度の助成についても、随時募集しておりますので、応募要領に従って、事務局宛にご応募ください。

なお助成を受けられた方には報告書を提出していただき、IUFRO-J Newsに掲載いたします。

会費納入・研究者登録のお願い

IUFRO-Jの活動は会費収入で運営されております。健全な会の運営のために会費納入をお願いいたします。

A、B会員におかれましては、会費納入と併せて研究者(会則第5条)、連絡員(付則1)の登録(事務局への連絡)をいただいております。また、転勤・退職等で機関を離れた皆様には、あらためてC会員としてご登録いただきますようよろしくお願いいたします。

納入方法

郵便振り込みの場合

郵便振替口座: 00190-3-159224

名義: IUFRO-J 事務局

*事務局といたしましては、できる限り郵便振り込みをご利用いただきますよう、お願い申し上げます。

銀行振り込みの場合

関東銀行牛久支店 普通預金口座 697583

名 義: IUFRO-J事務局 廣居忠量

注意:-(ハイフン)をお忘れなく。事務局代表者名が変わりました。

IUFRO-J News No. 73

平成13年8月31日

国際森林研究機関連合-日本委員会事務局

茨城県稲敷郡茎崎町松の里1 森林総合研究所内

TEL 0298-73-3211 (232)

(編集・発行)